



一貫教育を通じて生徒・学生の複言語能力をいかに伸ばすか

研究者所属・職名：経済学部・教授

ふりがな さかい かずみ

氏名： 境 一三

主な採択課題：

- [基盤研究\(A\)「外国語一貫教育における複言語・複文化能力育成に関する研究」\(2012-2014\)](#)
- [基盤研究\(A\)「一貫教育における複言語能力養成のための人材育成・教材開発の研究」\(2015-2018\)](#)

分野：外国語教育、言語政策

キーワード：外国語教育、複言語複文化能力、教員養成、教材開発、一貫教育、グローバル人材

課題

●なぜこの研究をおこなったのか？（研究の背景・目的）

日本の外国語教育は、過度な英語偏重が進み、しかも4技能開発に議論が集中している。言語学習者の社会的視野の拡大、同一社会内における異言語・異文化を持つ人びとやマイノリティ、言語学習困難者との共生という視点で外国語教育が語られることはいまだ少ない。しかし、今必要とされるのは、こうした点に配慮した、複言語・複文化能力育成であろう。本研究では、英語を含む外国語一貫教育において、生徒・学生の複言語・複文化能力をいかに養成するかを柱とし、そのための教材開発と、それを用いた総合的授業設計の研究を行った。その際、学校教育の枠を超えた生涯学習の観点から、学習者の自律性涵養に焦点を当てた。また日本ではこれまで、生徒・学生の複言語・複文化能力養成のためには、どのような人材が必要であるか、また人材をどのように育てるかほとんど研究されてこなかった。この点を探求するために、教員養成のあり方、研修方法にも踏み込んで考究した。

●研究するにあたっての苦労や工夫（研究の手法）

具体的には、以下を実行した：1) 慶應義塾内外の外国語教育の一貫性についての調査と分析、2) 外国語教育の一貫性を高めるための方策研究：文献調査並びに教育現場の視察、3) 複言語・複文化能力や「気づき」を涵養する教材研究：文献調査並びに作成した教材の現場(教員ワークショップを含む)への還元とそのフィードバックの分析、4) 教員養成・研修の方法と資料開発のための実態調査(日本国内及び東アジア、ヨーロッパ)



一貫教育を通じて生徒・学生の複言語能力をいかに伸ばすか

研究成果

●どんな成果がでたか？どんな発見があったか？

「外国語一貫教育の推進」に関しては、高大連携の観点から、多様な外国語学習歴を持つ学生の大学共通科目の受講状況を明らかにし、今後大学での教科課程編成や教育のあり方を検討する際の基礎資料を提供した。「複言語・複文化能力の養成」について特筆すべきは、二言語教育を長年にわたり実施しているベルリン・ヨーロッパ学校の専門家から、複言語・複文化能力の養成と、それに深く関わるCLIL教育の実態についての報告を受けたことである。それにより日本における CLIL の可能性について議論を行うことができた。またこの分野の先進校である、スイスの Haute école pédagogique du Canton de Vaud と共催で国際ワークショップを開催した。更に、複数言語の学習が学習者の一般的な能力にどのような影響を及ぼしうるかについて研究を行い、その成果を公表した。海外調査では、特にイタリア・南チロルにおいて、学校間の連携、教育監督局や地域の研究機関との連携、国境を超えた教育・研究の連携に着目した調査を行った。また、マレーシアと台湾の華人社会における複言語・複文化能力に関する調査、並びに国境を跨いだ高校・大学の連携の実態把握も特筆すべき成果の一つとして挙げられよう。「教材開発と授業設計」については、連携研究者らが開発した教材や教育方法を用いたワークショップを教員対象に行い、知見の共有を図ると共に、今後の教員研修のあり方も模索した。「気づき」「言語への目覚め」に関しては、コーパス分析により、帰納的学習に用いる外国語学習教材を開発し、その成果を発表した。「教員養成・研修」に関しては、日本独文学会主催ドイツ語教員養成・研修講座において、本研究で得られた知見が共有され、講座運営自体にも応用された。

今後の展望

●今後の展望・期待される効果

教員養成・研修に関し、生徒・学生の複言語・複文化能力養成のためには、どのような教員をいかに育てるかという研究は未だ道半ばである。この点が今後の課題となろう。また、複言語・複文化能力養成カリキュラムの作成のためには、特に欧州評議会が 2018 年に公表した CEFR Companion Volume の研究が、特に人と人をつなぐMediationの観点から、焦眉の急である。言語能力と教科学習能力の関係については、日本の学校教育(とその研究)ではまだ視野に入ってきていない。今後はこの点を対象とした研究を推進することが、日本における言語教育の制度設計において極めて重要なものとなるであろう。